

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01582

研究課題名（和文）「小さな共同体」の環境保全力に関する研究：生活環境主義の革新的展開に向けて

研究課題名（英文）Research on the environmental protection capacity of 'small communities':
towards an innovative development of Everyday Life-Environmentalism

研究代表者

古川 彰 (FURUKAWA, Akira)

関西学院大学・特定プロジェクト研究センター・客員研究員

研究者番号：90199422

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,800,000円

研究成果の概要（和文）：環境の複雑な「問題群」に対して、「普通の人々」にはどのような対応が可能か？こうした問題群に対処し改善する力はあるのだろうか？このような問いに対して1980年代に提唱された生活環境主義の現代的発展モデルを具体的現場から提出することを目的とした。目的達成のために、フィールドワークを通して次の二点を明らかにした。

第一は、生活環境主義の汎用性（応用力）を確認した。第二は、共同体の境界を越えて生起する深刻で重大な危機に対して、「小さな共同体」が生活知を駆使して柔軟に対応していることを明らかにした。それらの知見を通して複雑化し世界規模に拡大する環境問題に対応する新たな生活環境主義の可能性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究代表者らは1980年代前半から琵琶湖岸をはじめとする集落の調査を通して、開発や近代化の変動過程における「小さな共同体」の環境保全力を明らかにし、「生活環境主義」を提唱してきた。しかし、生活環境主義は地球規模あるいは国民社会レベルの構造的危機に対しては対応ができず現状追認の保守主義に陥ると批判されてきた。

本研究では、新しい世代の研究者とともに、琵琶湖岸をはじめとする国内外の「小さな共同体」の調査を実施し、普通の人々が暮らす「小さな共同体」が生活知を駆使して柔軟に対応していることを確認し、バージョンアップした「生活環境主義」の可能性を示し、そのデータを収集したことに意義がある。

研究成果の概要（英文）：How can 'ordinary people' respond to complex environmental 'problem clusters'? Do they have the capacity to address and ameliorate these problem clusters? The aim of this study is to present a contemporary development model of 'Everyday Life-Environmentalism' proposed in the 1980s to answer these questions, from a concrete field perspective. To achieve our objectives, two points were identified through the fieldwork. First, the versatility (applicability) of 'Everyday Life-Environmentalism' was confirmed. Second, we revealed that the 'small communities' responded flexibly to serious and critical crises arising beyond the boundaries of the community by making use of their living knowledge. Through these findings, the potential for a new 'Everyday Life-Environmentalism' to respond to environmental problems that are becoming increasingly complex and expanding on a global scale was confirmed.

研究分野：社会科学

キーワード：生活環境主義 環境保全力 災害文化 小さな共同体 村の日記

1. 研究開始当初の背景

現代社会はさまざまな種類の「環境問題」にあふれている。それは1960年代の「公害」問題から1990年代以降の「地球環境問題」まで多様な次元で生起しておりそれらが複雑に絡み合っている。何がこうした多様な「環境問題」を引き起こしてきたのだろうか？かつてのように営利のために「毒」をまき散らす「公害企業」や住民を無視した大規模な開発事業を推進する国家が一方にあり、著しく深刻な被害を被る市民や住民が他方にあるという、わかりやすい善悪二分法は通用しなくなって久しい。現実には、「公害企業や大規模事業」が活力を失いつつある地域社会に雇用と富をもたらしたり（たとえば基地や原発など）、生存困難レベルに陥った最底辺の貧困層が自然環境を破壊したりする（たとえば森林伐採や野生動物狩りなど）ことは、頻発している。また世界レベルの政治経済的力学を背景にした内戦や戦争（たとえば石油や鉱物資源の権利）は、アジアやアフリカの多くの熱帯雨林を消滅の危機においやっている。では、こうした多様なレベルの要因が複雑に絡み合っただけで生起する「環境問題」に対してはいかなる方策が有効であり意味あるものとなるのだろうか？

こうした「環境問題群」に対して、これまで支配的な対処策として用いられてきたのは、「京都議定書」や「パリ協定」といった国際的な条約や様々な国内法による規制によって、環境を保全するというものだった。それはいうまでもなく、近代科学（と合理的思考）に基づく解決策として社会的に受容され実施されてきたものだ。もちろんこうした法や制度による統制とは別に、個人の価値観や生活スタイルを見直し環境に対する意識と知識を高めることで、「環境問題」に対処することも重要な解決策の一つとして取り上げられてきた。

これらの対処法は、有効に機能する場合もあるのだが、重要な視点が欠けている。それは、「環境問題」と現場で直接接し相互に多大な影響を受けている人々の思考と対処能力を視野にいれていない点である。「環境問題」の現場では、「問題」は包括的・総合的に現象しているのであって、「環境問題」「政治問題」「経済問題」などのカテゴリーごとに分かれて現れているのではない。したがってそれへの対処もまた、その地域と社会に生きるひとびとが包括的かつ総合的に受け止めて解決のための働きかけをすることになる。つまり大地震や台風などの自然災害に起因する環境破壊も、原発事故、内戦内乱、そして貧困や格差などに起因する環境破壊も、そこで暮らすひとびとにとっては等しく生活と社会と密接に関わった「問題群」として認識され対処されるのである。こうした「環境問題」の現場で確認できるそこで暮らすひとびとの包括的で総合的な対処能力とその土台にある思考（思想）に着目して、それを積極的に評価しようというのが本研究の立場である。この立場の原点は、1980年代に研究代表者が研究協力者である鳥越皓之、嘉田由紀子などとともに行った、琵琶湖畔の集落の環境社会学的調査をもとにして提唱した「生活環境主義」という考え方であった。「生活環境主義」が注目したのは、当時は評価されることなく貶められさえていた村落共同体、とりわけ日本の場合、農山漁村社会の「小さな共同体」が備えてきた環境保全力であった。1970年代の大規模開発（琵琶湖の場合は、琵琶湖総合開発事業）に対して、実際に地域の生態・生活環境保全のために大きな貢献をしたのは、この小さな共同体の巧みな知恵と実践だった。またそれとは逆に、1980年代以降日本社会のなかでも拡大し始める「反開発」「自然保護」の主張によって、生活圏を脅かされることに抗い自らの生活世界の充実を確保したのも、この小さな共同体の知恵と実践だった。

こうして生活環境主義者は、一方で、現代世界を席卷する近代的開発主義や経済合理主義と、他方でそれとは対極の立場の自然環境主義から自らを区別して、「小さな共同体」の生活世界の保全を第一義とする視点を強調していった。以降、生活環境主義者は、この「小さな共同体」の生活保全の実践こそが、地域の生態環境と生活環境の双方を両立させる鍵であり、現代社会における「環境問題群」に対する有効な処方箋となることを理論的にも実証的にも明らかにしてきた（鳥越・嘉田由紀子編、1984、『水と人の環境史』、鳥越編、1989、『環境問題の社会理論』、古川・松田編、2003、『観光と環境の社会学』、古川、2004、『村の生活環境史』、中村・鳥越編、2014、『風景とローカルガバナンス』、嘉田、2008、『生活環境主義でいこう』、Furukawa ed. 2010 *Jarunhiti*、松田、2009、『日常人類学宣言』、Matsuda et al eds. 2017 *African Virtues in the pursuit of conviviality*、鳥越ら編、2018、『生活環境主義のコミュニティ分析』）。

しかしながら生活環境主義に対しては、とりわけ1990年代以降、さまざまな視点（それも相対立する視点）からいくつもの批判や疑問が提出されてきた。そうした批判を大別して整理すると以下の3点に集約できるだろう。第一の批判は、生活環境主義の「調和性」を批判するものだ。それは農山漁村の共同体内部の対立や差別あるいは政治的・経済的立場の多様性や分断を無視して、共同体を調和的なものとして「ロマンティック」にとらえすぎているというものである。第二の批判は、生活環境主義は国家と国家の権力作用をとらえられないという批判だった。その批判の前提となるのは、国家や巨大権力の意志と決意の前では小さな共同体の意思や判断などは取るに足りないものだという認識である。そして第三の批判は、生活環境主義の適用性、応用力に関するものだ。生活環境主義が前提にする「小さな共同体」は日本独特のものであり、生活環境主義は日本以外の社会では通用しない「一国理論」に過ぎず、国際的な適用可能性はないという批判である。この主要な三点の批判以外にも、21世紀にはいり、とりわけ開発社会学や開発研究において「参加型」「地元密着型」といった概念が、community-based の名の下に普及し

一般化すると、「生活環境主義」の小さな共同体主義はすでに常識化しており、目新しい主張とはいえないという疑問も生じてきている。

本研究では、こうした批判や疑問を受け止めそれらを乗り越えて、「環境問題群」を解決する有効で意味ある処方箋として生活環境主義を発展・再創造することを目指した。生活環境主義を時代にあわせて深化発展させることで、生活環境主義が21世紀の現代世界を生きる人びとにとって自然環境を保全し生活環境を創造するための有効な思考と実践の方法であることを示すのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の三点である。

第一は、「小さな共同体」が持つ環境保全のための潜在的創造性をはじめて社会理論のなかに位置づけた「生活環境主義」を、21世紀の日本社会だけでなく、アジア・アフリカ社会における環境保全のための新しいパラダイムとして再創造することである。生活環境主義は、1980年代、琵琶湖畔の集落の環境社会学的調査の中で、マクロな社会構造（システム）主義とミクロな個人主義（私化）の分裂を乗り越え、構造でもなく個人でもないそれらが創発的に接合する共同体に依拠して、拘束的な構造や自由な主体の中間に位置する「生活世界」が持つ環境保全の可能性を強調して誕生した。それは、人びとが生活世界の保全を最優先することで構築される共同体的公共性（コモンズと重複する部分がある）を通して、地域の河川や森林などの生態環境が保全されてきたことに着目するものだった。これに対して、先述したように、そうした潜在力が、日本以外の社会においても見出されるのか、あるいはこうした視線そのものが「小さな共同体」をロマン化して国家や上部権力の圧倒的力を隠蔽しているという批判が投げかけられている。本研究では、こうした批判を踏まえて、それに応えることで新たな生活環境主義を構築していく。そのための具体的方策として、大規模な自然災害（地震や水害）や地域を賛否で二分するような国策施設（原発や基地）建設や大規模事業の導入といった状況を取り上げて、それに対する小さな共同体の環境保全の対処方策および共同性維持の知恵と実践を解明する。さらには小さな共同体の外側から暴力的にもたらされた戦争や内乱による社会の断絶と環境の破壊に対して、小さな共同体が示す癒やし、和解、保全の豊穡な対応力をとりあげて考察を加える。こうした検討を行うために、日本社会の小さな共同体調査と並行して、アジア・アフリカ社会における小さな共同体の環境保全力を抽出し理論化を試みる。

第二の目的は、現代世界の「環境問題群」への対処に関して「小さな共同体」のもつ潜在的対処力の具体的な発現メカニズムを実証的に解明する点である。近代社会の構造的変化に関する定番の理解に従えば、農山漁村などの伝統的共同体はその過程で解体され、より産業化・個人化された社会が出現するというものだった。そこにおいては、「小さな共同体」は、全体社会の変化の一方的な被規定要素であり、周縁化された構造的弱者、あるいは時代に取り残された「過去の社会システムの残滓」として位置づけられてきた。その一方で、近代化の進展（あるいはポスト近代化の到来）は、こうした「共同体」を失われた人間性（社会性）の源泉として、過剰にロマン化したりファンタジー化したりする動きも生み出した。それはより上位の政治権力と連動して、ノスタルジックな言説や思想をつくりだしてきた（例えば大震災後の国家主導の「絆」運動など）。しかし本研究が注目する「小さな共同体」が示す地域環境保全のための潜在力は、こうした一方的な客体化やロマン化とは正反対のものである。それは、構造的な矛盾に対処する術を創り出したり、より上位の政治的単位や同レベルの共同体と折衝/連携しながら、解決の方策を見出したりするものだった。こうした過程をたねんに追跡し解析することを通して、「小さな共同体」のもつ環境保全のための可能性にとどまらず、国際社会、国家（国家連合）と諸個人の間位置する、上からの統制と下からの雷同とは区別された、新しい社会を創造する可能性までも具体的事例を通じて実証的に探求することである。

第三の目的は、21世紀の開発社会学・開発研究では「定番」化している「コミュニティに依拠した組織（community-based organization）」や「住民参加型（community participation）」とは根源的に異なる共同体観の提示にある。そもそも生活環境主義が前提にしてきた「小さな共同体」は、その地域で歴史的に生成・編成・創造されてきた思考、知恵、制度、価値を前提にしたものだ。しかし今日、流行のように使用されているcommunity-based思考の根底にあるのは、グローバルな価値・基準にもとづく共同体観である。英語の読み書きができ、近代的な学校教育を受け、グローバル言説を操ることができる人々によって構成されるcommunity-basedなのであり、それと相反するものは、「伝統」「迷信」「非合理」として二級化され、そのような地域の知恵を排除して、国家や法、グローバル正義などに親和的な人々がコミュニティの代表として承認され認知されるのである。本研究において着目しているのは、こうした開発研究において脚光をあびているコミュニティではなく、これまで否定され無視されてきた知恵や思考、制度や実践を外世界との相互作用のなかで再創造している「小さな共同体」の日常性、普通の暮らしのもつ創造性を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、現代世界における「環境問題」をとらえ、それに対処する方策として1980年代に提

唱された生活環境主義に注目し、その現代的発展モデルを具体的現場から提出することを目的としている。そのために、これまで生活環境主義に対してなされた代表的な批判を念頭に、それに答えるなかで、新たな生活環境主義をつくりあげていく。研究期間内にこの目的を達成するために設定した課題と方法は次の二点である。

第一の課題と方法は、生活環境主義の汎用性（応用力）を高めるという課題である。生活環境主義が日本独特な「村落社会」に適用できるだけでなく、アジア・アフリカの諸社会の環境保全を考える際にも有効であることを検討する。そのために、日本の琵琶湖畔集落と福島原発事故避難地域に加えて、ネパール・カトマンズ盆地の都市郊外コミュニティ、カンボジア東部の熱帯雨林帯の農村、韓国済州島北東部の小漁村、さらにはウクライナのチェルノブイリ原発事故避難地域の農村および西ケニアの熱帯雨林内の農村をとりあげる。ネパールではカトマンズ盆地のコカナ地区をとりあげ、膨張した都市人口を収容するために郊外に建設されつつある大規模団地に対する「小さな共同体」の対処法のなかに秘められた知恵を探る。また済州島ヘンウォン地区の漁民が、大規模資本による乱開発と外部からの「開発反対運動家」に対して、「伝統的」な契文化と村落規範を再創造することで巧妙に生活世界を確保していく過程を明らかにする。チェルノブイリの原発事故で旧ソ連国家によって強制的に立ち退きを命じられ消滅した「小さな共同体」は、依然として立ち入り禁止令が出されているにもかかわらず、その成員が連帯と癒やしを求めて帰還し無許可居住を継続している。そうした「違法な行為」のなかにある「小さな共同体」の目論見を検討する。また西ケニアにある貴重な（東アフリカに残存する数少ない）熱帯雨林の森は、今日、貧困化した周囲の村人にとって薪と木炭の日銭稼ぎの場となっている。環境保護のためのグローバル NGO や政府森林局からの森林保全の論理は、彼らにはなかなか届かない。こうした状況のなかで働く「小さな共同体」の創意工夫を検証する。以上のように、海外の事例を通して、生活環境主義が日本社会のみに適用できるローカル理論ではなく、より普遍的な適応力をもった社会理論であることが示されるのである。これに加えて、日本での調査を継続することで、その汎用性を高めていく。そのために、琵琶湖畔の集落調査においては、過去 300 年間にわたり村の責任者が書き続けてきた「村の日記」をもとに、「小さな共同体」の歴史的な対応力を抽出する。また「3. 1 1」で強制的に解体された福島の農村共同体が、避難先がばらばらになったにもかかわらず、かつての共同性を保持しそれを維持するための仕掛けをつくりあげていく過程とその意識について解明を試みる。

第二の課題と方法は、共同体の境界を越えて生起する深刻で重大な危機（災害や紛争など、これまで生活環境主義では対処できないと批判されてきた破局的な危機）に対して、「小さな共同体」がいかにそれと向き合い、対処し、その苦難を乗り越えてきたかについて、日本、ネパール、カンボジア、韓国、ウクライナ、ケニアの小さな共同体の集約的調査から明らかにする。日本では、水害常習地の東紀州、矢作川地域、江戸時代からの水害記録を村で保存している琵琶湖湖西地方の知内地区の三つの小さな共同体を事例に検証する。ネパールでは大規模地震で深刻な被害を受けたカトマンズ盆地コカナ地区など、カンボジアではクメール・ルージュとの内戦で社会が分断され紐帯が切断されたカンボジア東部のバイリン地区における社会修復・和解の方策のための「小さな共同体」の実験をとりあげる。韓国では大規模資本の工作によって分断された漁村共同体の再連帯化の試みを、ウクライナでは原発事故汚染指定地区からの避難命令を新たに読み直す共同体の知恵を、ケニアでは貧しさから熱帯雨林の伐採を行う村人に対する共同体の支援（制裁ではなく）の思考を分析する。こうした「小さな共同体」が、上位の政治権力から受ける制度的政策的指示やグローバル NGO など外部の組織からの金銭援助や「正義」の介入に対して、どのようにそれを受容変換しながら現実を作り直し地域の生態環境を保全のために創意工夫を凝らした実践を組織してきたかについて明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、現代世界における「環境問題」の様態を明らかにし、それに対処する方策として 1980 年代に提唱された生活環境主義に注目し、その現代的発展モデルを具体的現場から提出することを目的として、以下の三点について調査研究を行った。(1)「小さな共同体」が持つ環境保全のための潜在的創造性をはじめ社会理論のなかに位置づけた「生活環境主義」を 21 世紀の日本社会だけでなく、アジア・アフリカ社会における環境保全のための新しいパラダイムとして再創造する。(2)現代世界の「環境問題群」への対処に関して「小さな共同体」のもつ潜在的対処力の具体的な発現メカニズムを実証的に証明する。(3)21 世紀の開発社会学・開発研究では「定番」化している「コミュニティに依拠した組織」や「住民参加型」とは根源的に異なる共同体観を提示する。

これらの研究目的の達成に向けて次の二点を課題とした。第一の課題は、生活環境主義の汎用性（応用力）を高めるという課題である。第二の課題は、災害や紛争など、これまで生活環境主義では対処できないと批判されてきた共同体の境界を越えて生起する破局的な危機に対して、「小さな共同体」がいかにそれと向き合い、対処し、その苦難を乗り越えてきたかについて、日本、ネパール、カンボジア、韓国、ケニアの小さな共同体の集約的調査から明らかにすることであった。

期間中（2019-21、22-23 延長）は COVID-19 パンデミックが全世界を席卷したため、フィールドワークを研究方法の中心とする本研究は方法の変更を余儀なくされた。そのため不十分なが

ら実施した調査研究によって、日本に限らずフィールドとした各地域でも災害などの深刻な危機に際して、普通の人々が普通に暮らす「小さな共同体」が柔軟に状況を受け止め対処して来たことを明らかにした。またこうした調査地の具体事例の分析と研究会での討議を通して「生活環境主義」が共同体の境界をはるかに越えて生起する破局的な危機に対しても応用可能であることを確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 阿部利洋	4. 巻 72-3
2. 論文標題 移行期正義の社会学 集合行為の意図せざる連鎖を通じた社会的回復の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 208-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 達志保・熊澤美弓・野原由佳・古川彰	4. 巻 26
2. 論文標題 竹陽耕地整理組合・土地改良区所蔵資料目録	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 矢作川研究	6. 最初と最後の頁 67-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田素二	4. 巻 43
2. 論文標題 都市の記憶XIII 多重の犠牲者が突きつけたもの～広島三菱元徴用工被爆者問題から考える～	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 平和文化研究	6. 最初と最後の頁 2-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部利洋	4. 巻 105
2. 論文標題 グローバルサウスというプリズム	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 神奈川大学評論	6. 最初と最後の頁 117-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊地知紀子	4. 巻 300
2. 論文標題 大阪地域史研究と在日朝鮮人－「在阪朝鮮人史」を「住民史」に接続する－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヒストリア	6. 最初と最後の頁 271-291
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野康人	4. 巻 141
2. 論文標題 「関西学院大学」の計量テキスト分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 達志保、熊澤美弓、野原由佳、古川彰	4. 巻 28
2. 論文標題 愛知県庁文書『枝下用水関係書類留』「一一三 給水二関スル件報告」「一一四 配水二関スル状況報告」 (明治三十六年八月) 解題・翻刻	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 矢作川研究	6. 最初と最後の頁 61-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田 素二	4. 巻 24
2. 論文標題 在来知と科学知のコンヴィヴィアルな関係性のための試論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学研究	6. 最初と最後の頁 49～65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32262/wsca.24.49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松田素二	4. 巻 第19号
2. 論文標題 「学問と社会のコンヴィヴィアルな関係 「社会学は死んだか」シンボから考えたこと」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『フォーラム現代社会学』	6. 最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎌谷かおる・郡山志保・高橋大樹・古川彰	4. 巻 133号
2. 論文標題 「「村の日記」の読み解き方ー記録されなかったことを問うー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『関西学院大学 社会学部紀要』	6. 最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 達志保・野原由佳・古川彰	4. 巻 133号
2. 論文標題 「地域を知る・地域で知る・地域とともに知る枝下用水ー豊田土地改良区資料室の調査研究と実践ー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『関西学院大学 社会学部紀要』	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川加奈子・葛西映史子・古川彰	4. 巻 133号
2. 論文標題 「フィールドワークにおける実感の越境性についてのー考察ー古川彰研究室のネパール「共同調査」を事例としてー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『関西学院大学 社会学部紀要』	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村律子・古川彰	4. 巻 133号
2. 論文標題 「大震災後のコミュニティの変容に関する一考察ーネパール・バタン市I地区での共同実践、共同調査からー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『関西学院大学 社会学部紀要』	6. 最初と最後の頁 61-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Motoji Matsuda	4. 巻 Vlo.9, Supplement 2
2. 論文標題 Legitimacy in Conviviality- Learning from Legitimacy: Ethnographic and Theoretical Insights	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 URBANITIES Journal of Urban Ethnography	6. 最初と最後の頁 83-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 松田素二
2. 発表標題 原爆と朝鮮人：いかにして正義は回復されるのか
3. 学会等名 日韓連帯フォーラム(オンライン) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Motoji Matsuda
2. 発表標題 "Global Sustainability as a Weapon of the Strong? (Session 1) "
3. 学会等名 現代のグローバル社会の課題に関する 学際的国際シンポジウム 2021 ~ 持続可能なポストパンデミックの世界 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田素二
2. 発表標題 コメント「地域課題の解決から地球環境問題にアプローチする」
3. 学会等名 第1回 北大・地球研 連携協定記念シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊地知紀子
2. 発表標題 植民地主義的過去への反省と人類学
3. 学会等名 第57回日本文化人類学会研究大会第5回倫理委員会シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 NAKANO Yasuto
2. 発表標題 "General Discussion"
3. 学会等名 International Seminar on Collective Creativity 2023 Overcoming the Crisis in the World and Everyday Life through Collective Creativity (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Motoji Matsuda
2. 発表標題 "JAAS Japan Association for African Studies NOW"
3. 学会等名 2023 KAAS International Conference African Dynamics (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Motoji Matsuda
2. 発表標題 "What was the Covid 19 Disaster for the African Urban Bottom A Case Study of the Kangemi, Nairobi?"
3. 学会等名 International Seminar on Collective Creativity 2023 Overcoming the Crisis in the World and Everyday Life through Collective Creativity (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松田素二
2. 発表標題 「差別を乗り越える方法 違いを生きる技法をアフリカ社会から学ぶ」
3. 学会等名 日本学会議公開シンポジウム『Withコロナの時代に考える人間の「ちがひ」と差別～人類学からの提言』（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Noriko IJICHI
2. 発表標題 Post-liberation migration to Japan and the lifeworld of Korean women from Jeju Island, South Korea (英語)
3. 学会等名 AAS-IN-ASIA CONFERENCE, Online from Kobe, Japan (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊地知紀子
2. 発表標題 「市民交流の軌跡をたどる」
3. 学会等名 日本社会学会-日韓・韓日共同セミナー「未来の友好協力のための社会学からの提言」、明治学院大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊地知紀子
2. 発表標題 「朝鮮学校の差別問題と在日コリアン社会」(韓国語)
3. 学会等名 2019ナルダ学校民主市民フォーラム「リセット、新たに描く韓日関係」、韓国江原道教育支援庁(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Motoji Matsuda
2. 発表標題 Two marginalized (invisible) worlds of the contemporary Japanese Society Rural village society and urban slum quarter
3. 学会等名 East Asian Junior Workshop, 京都大学(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田素二
2. 発表標題 「人類の未来とアフリカの潜在力-集会的創造性の可能性」
3. 学会等名 長崎大学多文化社会学部シンポジウム「現代社会の困難を克服する創造性とフィールドワーク主義」、長崎大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田素二
2. 発表標題 「アフリカの知恵が世界を救う」
3. 学会等名 アフリカセミナーの会、仙台国際センター(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中野康人
2. 発表標題 「地位と感情表出-国会会議録と感情辞書を用いた分析-」
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会、東京女子大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NAKANO, Yasuto
2. 発表標題 "The Current Situation of DDIR :R package to utilize DDI as personal tools for social research data analysis,"
3. 学会等名 EDDI19- 11th Annual European DDI User Conference , Tampere University (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計22件

1. 著者名 阿部利洋 (分担執筆)、Ryoko Nishii、Shigeharu Tanabe、Tadayuki Kubo、Nobuko Koya、Ayako Saito、Ryo Takagi、Keiko Tosa、Tomoko Nakata	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Silkworm Books	5. 総ページ数 312
3. 書名 Ryoko Nishii and Shigeharu Tanabe eds., Community Movements in Southeast Asia: An Anthropological Perspective of Assemblages	

1. 著者名 古川彰 (監修)、達志保、野原由佳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 枝下用水資料室	5. 総ページ数 320
3. 書名 古川彰監修『合本 枝下用水日記 - 矢作川の流れのほとりから』	

1. 著者名 古川彰(分担執筆)、山極壽一、稲村哲也、阿部健一、清水展、池谷和信、石井祥子、入來篤史、魚住孝至、大貫良夫、他16名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学出版会	5. 総ページ数 526
3. 書名 稲村哲也・山際寿一編『レジリエンス人類史』	

1. 著者名 Motoji Matsuda(監修)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 364
3. 書名 Book Series: African Potentials: Convivial Perspectives for the Future of Humanity Vol.7 Contemporary Gender and Sexuality in Africa: African-Japanese Anthropological Approach Wakana Shiino, Christine Mbabazi Mpyangu(eds.)	

1. 著者名 Itaru Ohta, Francis B Nyamnjuh, Motoji Matsuda (編著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 332
3. 書名 African Potentials: Bricolage, Incompleteness and Lifeness, Itaru Ohta, Francis B Nyamnjuh Motoji Matsuda ed.	

1. 著者名 中野康人(分担執筆)、今田高俊、海野道郎、高坂健次、盛山和夫、平松闊、石田淳、遠藤薫、大浦宏邦、金井雅之、小林盾、佐藤嘉倫、数土直紀、瀧川裕貴、辻竜平、内藤準、浜田宏、三隅一人、与謝野有紀、池周一郎、他16名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 782
3. 書名 数理社会学会数理社会学事典刊行委員会編『数理社会学事典』	

1. 著者名 古川彰(監修)、達志保、野原由佳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 枝下用水資料室	5. 総ページ数 143
3. 書名 古川彰監修『枝下用水資料室のあゆみ 2008-2023』	

1. 著者名 松田素二(編著)、フランシス B ニャムンジョ、太田至、フセイン・イヌサー、大山修一、ヤウ・オ フォス=クシ、エドワード・K・キルミラ、栗本英世、オーウェン・B・シチョネ、マイケル・ネオコスモ ス、平野(野元)美佐、ケネディ・ムクトウ、山田肖子、エリザベス・ンドウンダ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 462
3. 書名 松田素二、フランシス B ニャムンジョ、太田至共編著『アフリカ潜在力が世界を変える オルタナティ ブな地球社会のために』	

1. 著者名 伊地知紀子(分担執筆)、玄武岩、金敬黙、李美淑、松井理恵、Morris-Suzuki Tessa、鄭炳浩、姜信 子、李成市、スー・ヒュー、他10名	4. 発行年 2024年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 244
3. 書名 玄武岩、金敬黙、李美淑、松井理恵編『グローバルな物語の時代と歴史表象 『Pachinko パチンコ』が 紡ぐ植民地主義の記憶』	

1. 著者名 土屋雄一郎(分担執筆)、関 礼子、宇田和子、金沢謙太郎、竹峰誠一郎、原口弥生、野澤淳史、清水万由 子、寺田良一、堀畑まなみ、堀田恭子、林 美帆	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 320
3. 書名 藤川賢・友澤悠季編『シリーズ環境社会学講座 なぜ公害は続くのかー潜在・散財・長期化する被害 』	

1. 著者名 松田素二（編著）、阿部利洋（分担執筆）、松村圭一郎、小森淳子、伊谷樹一、曾我亨、飯田卓、中務真人、竹沢尚一郎、宮本正興、津田みわ、他16名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 243
3. 書名 松田素二編 『アフリカを学ぶ人のために』	

1. 著者名 Abe Toshihiro	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Langaa RPCIG, Bamenda, Cameroon	5. 総ページ数 308
3. 書名 Mitsugi Endo, Ato Kwamena Onoma and Michael Neocosmos eds., African Politics of Survival: Extraversion and Informality in the Contemporary World, African Potentials Series, vol.1	

1. 著者名 伊地知紀子（分担執筆）、内田樹、平田オリザ、白井聡、渡邊隆、中田考、小田嶋隆、鳩山友紀夫、山崎雅弘、松竹伸幸、平川克美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 268
3. 書名 内田樹編 『街場の日韓論』	

1. 著者名 土屋雄一郎（編著）、阿形恒秀、アムリット・バジュラチャリヤ、磯部卓三、伊地知紀子（編著）、岩屋洋史、梅屋潔、大野哲也、田原範子、松居和子、他26名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 465
3. 書名 伊地知紀子・大野哲也・田原範子・土屋雄一郎・林泰子・松居和子編 『雑草たちの奇妙な声 - 現場ってなんだ?!』	

1. 著者名 松田素二（編著）、阿部利洋（分担執筆）、松浦雄介、野村明宏、倉島哲、坂部晶子、安井大輔、石原俊、佐々木祐、宋基燦、丸山里美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 280
3. 書名 松田素二編『集合的創造性 コンヴィヴィアルな人間学のために』	

1. 著者名 松田素二（編著）、阿部利洋（編著）、北島義和、濱西栄司、鍋倉聰、福浦一男、中村昇平、松浦雄介、右田裕規、近森高明、朝田佳尚、田原範子、倉島哲、佐々木祐、川田耕、山本めゆ、李洪章、井戸聡、翁和美、森田次朗、大野哲也、安井大輔、野村明宏、井口暁、西村大志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山代印刷株式会社出版部	5. 総ページ数 372
3. 書名 松田素二・阿部利洋・井戸聡・大野哲也・野村明宏・松浦雄介編『日常実践の社会人間学 都市・抵抗・共同性』	

1. 著者名 MATSUDA Motoji	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Langaa RPCIG, Bamenda, Cameroon	5. 総ページ数 -
3. 書名 African Potentials Series vol.1-vol.5 (シリーズ編集)	

1. 著者名 MATSUDA Motoji	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Langaa RPCIG, Bamenda, Cameroon	5. 総ページ数 296
3. 書名 Ochiai, T., M.Hirano-Nomoto & D.E.Agbiboa eds., People, Predicaments and Potentials in Africa, African Potentials Series, vol.3	

1. 著者名 古川彰、達志保、野原由佳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 枝下用水資料室発行	5. 総ページ数 491
3. 書名 『枝下用水 補助用水史報告書』	

1. 著者名 伊地知紀子(分担執筆)、今泉隆裕、大野哲也、宮本孝二、長崎励朗、小山桂史、廣瀬立朗、星秋夫、田原範子、岩谷洋史、阿部利洋、古村学、石田あゆう、中村律子、浦輝大、木島由晶	4. 発行年 2019年
2. 出版社 嵯峨野書院	5. 総ページ数 357
3. 書名 今泉隆裕・大野哲也編『スポーツをひらく社会学』	

1. 著者名 Yaw Ofosu-Kusi & Motoji Matsuda(eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Langaa RPCIG, Bamenda, Cameroon	5. 総ページ数 276
3. 書名 The Challenge of African Potentials: Conviviality, informality and Futurity	

1. 著者名 Abe, Toshihiro (ed.)Peter Manning, Amanda Conroy, Daniel Bultmann, Mosseny So, Mahdev Mohan, Sangeetha Yogendran, Leang Sok, Sam An Vong Em, Vinita Ramani ,他1名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Silkworm books, Chiang Mai, Thailand	5. 総ページ数 309
3. 書名 The Khmer Rouge Trials in Context	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊地知 紀子 (IJICHI Noriko) (40332829)	大阪公立大学・大学院文学研究科・教授 (24405)	
研究分担者	松田 素二 (MATSUDA Motoji) (50173852)	総合地球環境学研究所・研究部・特任教授 (64303)	
研究分担者	中野 康人 (NAKANO Yasuto) (50319927)	関西学院大学・社会学部・教授 (34504)	
研究分担者	土屋 雄一郎 (TSUCHIYA Yuichiro) (70434909)	京都教育大学・教育学部・教授 (14302)	
研究分担者	阿部 利洋 (ABE Toshihiro) (90410969)	大谷大学・社会学部・教授 (34301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関